

女性達からのメッセージ

東日本大震災の被災地 宮城県石巻市から

2015年9月

はじめに

2011年3月11日、東日本大震災は甚大な被害をもたらしました。地震と津波は多くの大切な家屋や建物、財産を奪い、尊い人命を犠牲にしました。宮城県石巻市でも復興と復旧が少しずつ進み、道路工事、工場や会社、店舗の新設と修復、住宅の新築など、街の姿を変えていっています。しかしながら、災害公営住宅の建設、住宅地の土地の造成、高台移転整備は、発災から5年になろうとしているにもかかわらず解決してない問題が山積しています。それでも毎日の生活を送らねばならない人々です。時間は容赦なく過ぎていきます。

目に見えないものはどうでしょうか。震災直後から、被災者と呼ばれる方々は、何を考え、何をどう感じているのでしょうか。特に女性達の気持ちはどうなのでしょう。生活の再建もままならず、まだ不自由な生活を余儀なくされている女性達。そんな女性達への被災体験の聞き書を試みました。

それは10分間の立ち話であったり、お茶を飲みながらの30分の雑談であったり、きちんと座っての2時間を越えるインタビューであったりしました。3年が過ぎた2014年の3月から記録を始めました。20人です。年齢も生活環境、被災状況も違う女性達です。20人、誰ひとり同じ人生を送っておらず、誰ひとり同じ被災体験をしておらず、また誰ひとり同じ考えや気持ちをもっていません。

20人、一人ひとりがそれぞれ、震災前、震災後の人生を生きる唯一の特別の存在です。彼女達の口から紡ぎだされる言葉から、私達は何かを感じ、何かを未来へ伝えることができればと思います。20人の誰かの人生に共感したり自分を重ねあわせてりできるかもしれません。

1) A.Bさん(60代)

被災から3年経って、やっと希望をまた描けるようになりました。息子(40代)が牡蠣養殖を継ぎ、夏はカフェを開きたいという計画を持っていることを知り、気持ちが前向きになりました。これまで、将来が描けない、見えない、考えられないという状態でしたが、この息子の言葉で気持ちが変わりました。

震災前まで、民宿を経営していました。蔵を改築したもので、長い間の夢が実現したものでした。そしてグリーンツーリズムやブルーツーリズムを実践していました。環境問題や自然保護は、自分にとっての大きな関心事で、たくさんの夢があったものです。山、川、海を活用して様々なワークショップやツアーを開催しました。例えば、魚釣りや牡蠣養殖の体験、貝や網を利用した手芸、山の散策等。夫が採ってきた海の物を料理してお客に出し、一緒に食べながら話しをしました。夫は漁業と牡蠣養殖に従事。民宿は津波によって破壊され、夫は養殖の道具や機材、船もすべて流失。

仮設住宅に移りました。震災後、夫は脳梗塞で入院。母が他界。夫は、「負けない」と早朝から海へ出て、新しい船で魚を獲り、牡蠣の養殖を再開。夫は一生懸命働いています。自分も手伝いますが、少し疲れていて休みたい気持ちもあります。息子の望みが、自分を前に進ませています。

2014年3月2日



被災直後に咲いた水仙 2011年

2) C.Dさん(60代)

震災をたまに思い出します。旧式のストーブにより暖をとり、料理もしました。電気ストーブも併用。徒歩、自転車、車を使い、体力が必要だと実感しました。日ごろから健康に暮らすことが大切ではないでしょうか。駆けつけたボランティアや知人のために、みそ汁を作りました。地球環境に気をつけたいです。震災後、修復した自宅を地域のために開放し、近所のお年寄りとの集まりを開いています。このことにより、震災当時のことを聞き、初めてわかることもあります。たとえば、震災時、我が家の猫がどうやっていたか。声掛けなど、近所付き合いの大切さを知りました。留守にする時、近所に声をかけると、鍵をかけないで出かけることが可能。

「自分は生かされている。生きることは生かされていること」と実感。津波の犠牲にならなかった自分。震災がきっかけで何かが変わる自分。以前よりもっと、「何かしなくでは」との気持ちが強くなりました。自分の意志でなく亡くなった人の分まで。自宅は高台にあるのに、たまたまあの日は海辺にいたり、高台への避難後、自宅へもどった人達が亡くなりました。他人に手招きされて、避難した方で助かった知人達。助かった人、犠牲になった人の違いについて考えます。なぜ自分が助かったか、“何かしなさい”と言われていた気がします。人のために。同じ場所、同じ時間、同じ条件でいたのに、生死の分かれ目は何なのだと自問。震災により、人それぞれの本質が出るのかもしれない。人間性、生き方について考え、“これから”について考えたいです。

もう物に執着していません。何を大切にするかといった価値観が変わりました。人とのつながり、近所とのかかわり、相手を思う言葉や行動が大切で、そっと手を差し伸べたり想像力を働かせたりすることが大事かもしれません。いろんな経験をするのが人生を豊かにし、優しくします。必要なものは必要な時に来るのではないのでしょうか。自然を大切に。黒い悪臭のヘドロを海から返されたのです。しばらく2階の6畳一間に夫婦と息子の3人暮らし(+猫3匹)が、幸せで心がひとつでした。ロウソク、電池式の明かり。朝日と共に起き、太陽が沈むと就寝。私たち人間は、生き方を変えるべきです。何が無いかではなく、何があるか。自然は自然を修復します。2014年8月には、閉店した知り合いの喫茶店を引き継ぎ、喫茶店経営を始める予定。

2014年3月29日

3) E.Fさん（70代）

店の床まで津波が来ました。薪でピザを作る店を経営しています。そのピザ釜が無事であったために、ガスや電気がなくとも薪で食事を作り、避難してきた人達に提供。10歳の時に東京大空襲を体験。真っ赤に燃える大火災や夜空から降る焼夷弾、6年生に引率された学童疎開を覚えています。東日本大震災時、あの東京大空襲をすぐに思い出しました。あの戦争当時を思えばなんとかなるのです。自分は恵まれていると思います。のんびり、マイペースの一人暮らし。一人だからなんとかなると思います。

一時期、避難所や店の大家さん宅で暮らしましたが、4日後には店に戻りそこで暮らしました。自宅への道路は寸断され帰宅困難。悲しいとか辛いと思いませんでした。お客様が立ち寄ってくれたことで、「店を早く再開したい」と強く感じました。しかし周囲の店がまだ再開していないので、自分の店だけ再開していいか迷いました。

両親への感謝の気持ち、元気に産んでくれてありがとう、育ててくれてありがとう。5年前、夫が亡くなった時も店を続けたいと願いました。夫が主にやっていたお店を今度は自分一人できりもり。今度の震災でも、神様が店を守ってくれたので、店を続けたい、自立していたいと思いました。運命かも。親せき、子供達が親切にしてくれ、一人では生きていけないと実感。日ごろの付き合いが大切。いいお手本として、前向きな人に会おうと励まされます。

当時店にいて自宅へ戻ろうとしたのですが、途中でなぜか店に引き返しました。そのまま行った人達が津波の犠牲になりました。運命の別れ道があるのかもしれませんが。震災、あれは何だったのでしょうか。辛い時、悲しい時、運命だと思います。今日と同じように、明日も生きてだけです。店には、いろんな客が来ます。震災前、喧嘩していた二人の女性が、震災後、店でばったり偶然再会し、仲直りした場面を見ましたよ。

2014年4月13日



高橋英吉作「母子像」

4) G.Hさん (70代)

千年に一度の震災に遭遇できて「ありがとう」。千年に一度しかないことを経験できたのです。6歳で終戦という戦争体験があります。戦後はもっと辛かったです。悲しんでいても、しょうがないです。津波で汚れた物をすべて捨てる人がいますが、洗えば使えるのにどうして捨てるのでしょうか？買えばいいと思って捨てるのは、もったいない。経営しているアパートも全壊。住人に早く満足のいくアパートを提供したいと思います。人が住めば復興も進むでしょう。

ある学校の茶道部を無償で指導していますが、被災後すぐに若い学生達が支援にきてくれました。お金にかえられない豊かな心、恩返しを感じました。物の捉え方やあり方を変え、出会いを大切に、自分をしっかり持っていれば立ち直りが早いです。この3年で、個人個人の生き方の違いにより、立ち直りのスピードに違いがあると感じます。避難所から4日目に自宅へ戻り、アパート再建を決意。ローンを組みました。地域への貢献。津波にあったから、やれることがあります。53歳で夫が他界。自分が変わることが大切です。尽くすことが喜びであり、相手も自分に尽くし返ってきます。自宅を防災ビルに改造したい希望です。市から補助金もあります。

一階を襲った波の上にプカプカ浮かぶ茶箱。中には茶道の高価な茶器。着物は何故か二階で無事。実は震災の前の週に、大きな茶会（初釜）の準備をし、高価な茶器だけ茶箱に入れて床の間においておきました。生き残った茶器を見て、“自分しかできない茶会”と直感しました。何かに守られている気もします。物やお金はなんとかあります。人生は所詮終わることを知っています。茶道から教えられたものがたくさんあります。50代までは、自分のために生き、60代からはみんなのために伝え、教えたいと思ったのです。震災によって、いろんな経験をさせてもらいました。

3年後の今、心が満たされていない人が多いです。個人差が大きいけれど、個人として震災を乗り越えるものではないでしょうか。自分をどう生かしていくか、自分で、はいあがり、必要とされる、自分らしさをもって生きたいです。2014年以降は心のケアが必要です。普段から自分というものを持っていること。見返りを求めない。子どもや動物を育てて、自分も育つ。自分を確立していると相手を認め、許すことができます。運をつかむのは、精神の自立。自分に磨きをかける。他人をうらやまない、うらまない。経済的自立。品格（品性）。足るを知る。生きがいを持ち、どう生きるか。心の持ち方、毎日の生き方、人間関係について考えています。

2014年4月17日

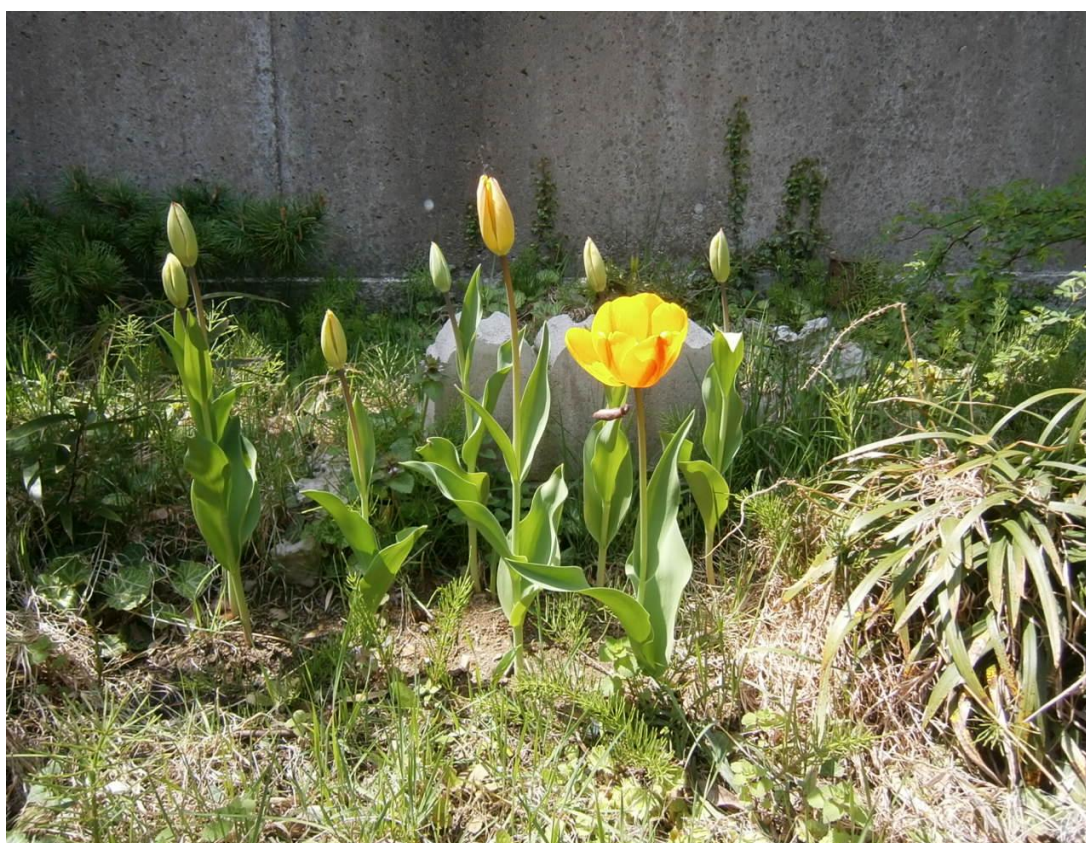
5) IJさん（30代）

女性は強くてすぐに行動し、気持ちの切り替えが早いと思いました。ガレキやヘドロで食べ物が不自由で生活がままならぬ時、“髪を切りたい”、“きれいにしておきたい”、“きれいになりたい”と自分の美容院にやって来る女性達。白髪が増え、抜け毛も多くなった当時の女性達。ぱっきりショートヘアにする人もいました。また洗髪できない日があるかもしれないので、ショートヘアがいいと言う女性達。

ヘアローションやスキンケアの品に喜ぶお客。非常時ですら髪や肌のお手入れを気にする女性の客達。肌荒れ、ぱさぱさの髪。店の前の白いライラックが津波にも負けず3年ぶりに咲きました。潮をかぶっても咲く花達。この美容院にきておしゃべりを楽しみ、お菓子を持参してくる客。癒しの時間を求めているのでしょうか。自分自身、お客様と話し仕事をすることで支えられ、助けられました。

避難所で、近所の人と新しい関係を作りました。日本人でよかったと実感しました。4日目には、あふれる支援物資。ボランティアの人のありがたさ。2012年に結婚。

2014年4月27日



2014年 春

6) K.L (70代)

震災当日、近所の公園に避難してきた家族を自宅へ招き入れました。4日後に、自分の息子家族や親せきが避難して来たので、5家族、一緒に暮らす共同生活の開始。卓上コンロでおかゆ。小学校が燃える空。交代で水汲み。被災後、手紙が届く驚き。知りあうなど想像してもいなかった人達に出会いました。関わりっておもしろいですね。いろんな人達と深い話（生と死について、人生観など）。人間としての豊かさとは何でしょう。

自分は絵手紙の講師なので、全国の仲間から絵手紙が届くようになりました。届いたウチワ（絵手紙）を避難所に配りました。公民館にウチワを配ると、“絵手紙をおしえてください”と被災者から頼まれ、始めました。筆や絵の具、ハガキ、パレット等の支援をいただき、避難所や公民館で開始。子どもたちへも。物でなく、心の結びつきが長く続くのではないのでしょうか。風化しないように、伝えたい。絵手紙教室では、描くより話したい人もいます。3年目で花を見て希望や明日について話す人達。

70歳の今、ますます夢のあふれる絵をあと10年は描きたい。

生と死が身近に感じ、一日を大切に。自分の原点を考えたりします。自然の大きな力、神かも。すべてのことに意味があります。実は震災の3ヵ月前に家を購入したばかり。直感で夫が、即日購入を決断。以前の家にいたら、大被害を受けていました。現在の家があるから、たくさんの避難者を自宅で受け入れることができました。いろんな人々が訪問する家。高台にあるので、安心。

自分は、“すぐやってみる” という決断が速い人間です。48歳で婦人病を患った後、ぱっと明るくなり、別の自分に気がつきました。専業主婦でしたが、50歳で絵手紙を始めました。一本の電話から54歳で絵手紙の講師として教室を開きました。夢、希望、明日に向かって生きたい。元気になっていく。

2014年4月29日

7) M.N (60代)

3月11日当日、自分の宝石店を津波が襲い、ヘドロとガレキに埋まりました。“もう店はだめかなあ”と思いました。しかし次の日、小高い丘を登り“自分はどうすべきなのか、どうしようか、どう生きてらいいか”と考え始めると、アイデアが次々と浮かびました。その小高い日和山へ毎日登りました。一週間後、店へ行き、“被災したのは自分だけじゃない”とわかりました。

ボランティアの方々が水を持参のうえ、いろいろな物を洗っていただきました。そうしているうちに、“お客様の宝石も震災で汚れたらろう。その宝石をクリーニングしてあげよう。きれいにしてあげたい”と思いつきました。300人のお得意様にハガキを出し、汚れた宝石を持ってきてもらい、業者に宅配で送りました。クリーニングしてきれいになった宝石を、きれいな袋やケースに入れて、お客様にお返ししました。生まれ変わった宝石。物を売るためじゃなく、ただクリーニングしてあげたかったです。震災後から、毎日、新聞で死亡者リストを見て、お客様の名前がないか確認しました。

仮設商店街の店舗の抽選に応募し、当選。自分も何か役に立ちたい、今しかできないことを精一杯やろうと思いました。自分がしてもらって嬉しいことを、他人にもすると、自分に巡ってくるのです。思ったらすぐ行動のタイプ。この店の、この町でのありかたを模索。銀行へ相談。意気込み、やる気が通じたのか銀行が、相談にのってくれる。その担当者いわく”オーラを感じる、側にいたい“。自分が商売できているのは、お客様、従業員、周囲の人達のおかげ。感謝。みんなに何かしたい。迷わない、直行。必ずできると信じます。自分でドアを開く、ちょっとした一歩。30代から40代は苦勞の連続。若いころから 経済的に自立をめざし、57歳で生涯忘れられない出来事があり、そんな時、町内のみなさまに義母を預かっていただき感謝です。

人は人、比べない。比べてもどうしようもない。イメージが大切ですから、仮設店舗だからといって中途半端にせず、ちゃんとしたものを作りたい。結果は後からついてきます。ちょっとしたきっかけを太いパイプに。人を大切に、一人では生きられない。自分にはなぜか人が集まって来て、相談していきます。人はすばらしい、人間でよかった。震災後、パソコンを習い、アナウンス教室にも通いました。誰かのために役に立たなければと思います。みんなを助け、目の前のことを確実にすることが大切です。39歳で大病。60歳を過ぎたら、毎日全力。好奇心いっぱい的人生。万年少女みたい。

2014年5月17日

8) O.P (70代)

女性は強い、守るべき家族、地域がありますから。どう自分や周囲を守るか常に、考えています。今の自分は命、心と時間について考えています。まず自分を助け、そして他人を助けたい。お世話したいと強く思います。生き残った分を何かでお返ししたい。生き残った命、使命。亡くなった人の分も。3年間はあっという間、何かやっていないと気がすまない。何かかたむけるものがあるといいですね。心のよりどころが必要。日ごろのつきあいが大切。

知り合いの民宿が流失、しかしその女性は高齢者用弁当屋を起業し成功しています。その女性は、悩んだ時に生け花があったことを思い出し、この自分の生け花教室に通い始めました。祖先の言葉 “神社へ逃げろ”を実感。避難所では身じたく(髪、服)も気になりました。乾パンだけでも空腹にならず満足。食糧を分けて食べると心が満たされました。近所の顔見知りと一緒にだったので、まとまりがありました。自分だけ食べようと思わない人々。

くよくよしてもしかたない。これまでの生き方が反映されると思います。危機感がなく何とかなると考えました。夫が“生け花をまだやるのか?”と聞いた時、“あきらめない”と即答。流されず残った泥だらけの花弁や道具があって壊れていないからできると感じました。2011年6月から再開。教室で生徒さんが顔を合わせると日常がもどってきました。それで、いろんなことを忘れることができます。物を失っても、身に付けた技術は失われません。

コミュニティの大切さに気がつく。生活の余裕も大事で、何が大切かわかってきます。自分と家族の健康が一番。仮設の孤独死が気になります。自分だけと思わず、近所を大切に。自宅を開放してサロンを開きたい。大きな公民館でなく近所を招いてのお茶。“場所”でなく“人”。年代によってできることがあるのではないのでしょうか。高齢者も若者もお互いに支えあい、両方いることが必要。突き破ろうと思わず、曲がればいい。不安がなく深刻に考えない。小学生の時に養女となり、山形から石巻へ。赤い着物を着せられて。一人っ子として育ったので、今は沢山のの人に自宅に来てほしい。

2014年5月22日



個人宅でのキャンドルナイト

9) Q.R (60代)

物は、あまり必要ありません。震災前は物があふれていました。自分は、他人から必要とされると生きていけると思います。喜ばれると嬉しいです。避難所で弁当配りをした時、そう感じました。まさか自分が仮設に住むとは信じられません。震災後、オカリナを習い始め、オカリナ教室で、ある女性に出会いました。娘さんとお孫さんが行方不明だそうです。この女性は誰かに話しをきいてほしく、だんだん心を開き始めるようになりました。

支援の人達とつながり仲間と集まっています。自分は、人のいうことをよく聞いて、信用するということを学びました。何があるかわかりません。3年経って今やっと涙が出ます。発想を転換し、工夫するようにしています。“これでいい”と気持ちを楽にして、これがなければいけないと思わないようになりました。くよくよしないこと。できないことは、できないと言い、無理しないようにしています。自分を大切に、代わりはいくらでもいると考えています。後悔しないように。カリカリしないこと。青空、田園、雑草もきれい。怒りも持ちこさない。弟と同居していますが、ないがしろにしていたことを反省し、ごめんと言うようにしています。弟の後ろ姿に笑いかける風呂上がり。

2013年冬からレース編みを始めました。お世話になった人にあげたいのです。20代にレース編みをやっていましたが、再開。小さなことが幸せです。30代は必至に働く事務職。40代は認知症の母の介護。自宅にいるのに、“家に帰りたい”という母、徘徊する母を介護して眠れない毎日でした。頼れるのは自分だけで、神経が休まりませんでした。入退院の繰り返しで10年。そんな経験があるから、震災後、避難所に入って、あれこれボランティアさんがやってくれるので幸せでした。家を失ったのはしかなくて、あきらめます。くやしさがありません。家を失ったのは自分だけじゃない、他の人も同じです。家族がいるってすばらしい。心を開いてくれると嬉しい。時間が癒してくれます。

2014年6月2日



川辺にて

10) S.Tさん (60代)

弟の奥さん、息子の奥さんが、三カ月間、私を快く受け入れてくれました。兄弟、親戚などとの日ごろの付き合いが大切だと実感しました。いざという時に助けてくれます。非常時に本当の姿が現れます。自分は恵まれて、ありがたく、幸せ。家族を大切にしてほしいです。落ち込まず、困難をすり抜けるのが上手な自分です。自分に甘く自分を許しています。自分が好きなのです。今までの人生を振り返り、これまでの人生は何だったのだろうと考えたり、考えなくてもいいことを考えるようになりました。友達って？何でも話せる人がいない自分。すべて、自分に起因していると思います。恥ずかしい事、辛い事、自分で選んだことかもしれません。何の役にも立たない自分。自分って何？

津波で沖へ流されて行く自宅を見て、家の制度や地域から解放されると思い、ほっとした面もあります。かつては何とも思わなかったことです。無くなったものは、しかたありません。皿や服、あの家はどこに行ったのでしょうか？湾にはなく、でも海のどこかにあるかも。幸せだった、あの家も好きでした。祖先から受け継ぎ嬉しい。改築10年で流失。根こそぎもぎ取られた震災後の生活。前向きになったり下向きになったり。移転や造成のことを考えると、不安です。子どもたちにとっては、あの場所が実家であり、故郷。帰る土地なのです。心がおれたとき、あの場所を思い出します。

自分がどういうふうに暮らしたいのか考えます。夫との二人の生活、今の仮設の自宅を大切にしたい。家族が心地よければ怖いものはありません。人をうらやましいと思いません。自分を受け入れ、認めようと努めています。自分は幸せだったけど、夫や息子はどうだったのでしょうか。震災後、本で救われました。現実から逃避でしょうか。若いころ、図書館や書店で働いたことがあります。人は一人では生きていけず、いつかは人の世話になります。自分はどういう存在だったのか気になります。何か間違っていたらどうかと。人を大事にすれば自分に返ってきます。物事をまっ正面から受けられないようにしています。肉親を亡くした人の気持ちを想像できません。自分より大変な人がいることをたえず、考えながら発言するようにしています。

過去がぶつりと断ち切られる2011年。毎日が普通にくるかどうか。あたりまえはありません。”ふつう“を大切に。日常が幸せです。”続き“が帰ってくるといいとも思っています。失くして初めてわかることがあるのですね。井戸水で助かったことも思い出されます。あの日は、星がきれいで、自然ってすごいと思います。海がおだやか、きれい。

2014年6月15日

11) U.Xさん(70代)

前向きに穏やかに、どんな環境も受け入れたいです。家の二階に避難していて、放送局のヘリコプターに手を振り、“息子がテレビを見ていて、自分が無事であることを知ってくれたら”と期待していました。一人暮らしなので自分のことだけ考えればいいので楽でした。健康の大切さ。自分は友人に恵まれていることに感謝。命は惜しくありません。息子の妻の実家に避難。そこには井戸や薪ストーブがあり、24人の共同生活が始まりました。きれいな、おしゃれなコーヒーカップでコーヒーをいただき、心の栄養だと思いました。被災して、人の本性がわかった気がします。例えば、安い物(100円)だけ送ってくる知人や、送ると言っても何も送ってこない知人。

離婚の方がもっと辛かったです。37歳の時で、夫がもどってきませんでした。悔しくて泣きました。辛くて、屈辱で、なさけない。離婚に比べれば、震災は天災ですからあきらめがつきます。当時、小学1年と6年だった子供達にもうしわけなかったです。子供二人を連れて実家に戻った時、両親は「もどってきて幸せ」と言ってくれました。近所の人もいい人でした。パートの仕事をいくつか始めました。練り物会社にいた時、中国人研修生13人を受け入れ、緊張と不安の生活指導員となりました。誠実に対応したつもりです。自分の顔は自分で見れませんが、相手の目に映る自分は見えます。真剣に生きた一年。中国語も、シャンソンも簿記も習いました。その苦勞を覚えていて、次男の息子は、今、とてもよくしてくれます。他人をねたまないようにしています。

新聞配りのボランティアを仮設の自分の家に招き、お茶をごちそうしています。各地のボランティアと交流。友人を大切に。当時、高校に進学しない人や集団就職する人が多かったです。そんな同級生達と長年つきあっていて、被災した時、支援の品を送ってきてくれました。今でもオリンピックの年に(4年に一度)同級会をします。ずるいや嫉妬する人は、友人にいません。

小さいころから明るい自分。今も気分は18歳。高校の制服が着れるような気分。前向き、楽しい話が好き。仮設も楽しいです。狭いし隣の声も聞こえてうるさいけれど、掃除が簡単。物は考えようです。すべて一長一短。よいも悪いも自分しだい。幸せ、感謝。物はいつか無くなります。一人暮らしを楽しみ、愚痴を言っても仕方ありません。歌、ボイストレーニングのレッスンを受けています。70歳になって、大学の先生のお手伝いの仕事をしています。人がいるって素晴らしいです。一人はつまらない。いつ死んでもいいけれど、こんな人生が送れるとは想像もしませんでした。今が一番幸せ。再度、中国語にチャレンジし、中国からの留学生との交流も楽しみです。

2014年6月17日

12) Y.Z (60代)

“ここから、海側に家を建ててはいけない”という石碑の文言を守らなかった石巻の人々。40年～50年前、不動産屋は、“ここは津波がくるかも”と忠告しましたが、土地を購入した人々。震災から3年目の今、再建は過酷。震災当日、亡くなった人の分まで生きようとすぐ思いました、生かされたからには。近所のみんなは亡くなり、家はありません。しかたない。みんなも同じです。ご遺体をたくさん見ました。みんなに支えられたので、どう恩返ししたらいいのでしょうか。物は入りません。何がなくとも、生きていだけでいいとみんなに言われました。その言葉に支えられました。物にも心にも支えられたのは確かです。信仰を持っている人は強く、やさしく、やわらかいですね。

震災遺構として残そうとしている小学校の建物がありますが、自分は保存に反対。見ると辛いし、たくさんの方が亡くなったことを思い出します。自分は幸せ、夫と二人。しょぼくてもいられません。家を再建しても、それが終わりではありません。カンボジアのアンコールワットを見たいです。この3年。わけのわからない3年。建設のビジネスをしたいです。姉の死(2013年)は震災より辛いです。国内外の誰かに恩返ししたいです。友人がたくさんいてよかったです。相談できる友達。一人では何もできません。信頼が大切です。物はなんとかあります。泊まりにおいでと言ってくれる友達がいます。

自分のためだけでなく、車を失った知人の分まで、車で送迎。実は45才で免許取得。すっぱり家屋を失いましたが、家族がいるから大丈夫です。震災後、他人の人間性や内面がわかりました。ある人から“ざまあみろ”と言われ、ショックでした。厭な人とは会わないし交流しません。遠方から米、味噌をもってきてくれた人達。これからは好きなように生きています。20年間働いたので、いつ死んでもいい。後悔はありません。それなりに人の世話もしました。夫をおいて逝きたくはありません。男一人は悲しい。考えてもしかたありません。問題にたちむかいます。震災前は、指輪、皮物が好きで着物、靴、バックをいっぱい持っていました。今はまったく関心がありません。指輪もつけない。不思議です。ほしいものは、ありません。物欲が無くなったのです。若いころ夫は船に乗り、自分は一人で子育て。子どもを預けて働きました。

2014年6月22日



アメリカの子供達から手作りカード

13) B.Aさん(50代)

女川の出島の家が流失。震災当日、三男が石巻で乗ったはずの電車が津波に巻き込まれました。しかし三男は乗り遅れて、無事でした。行方不明の時、絶望しているひまがありませんでした。息子を失くしたかもしれないと、市役所で避難している人の名簿で名前を探しましたがありませんでした。半分あきらめました。無事でした。警察所で、ふてくされた態度を取りました。駅にも人がいなくて説明がありませんでした。自分より、夫の方が三男をかわいがっていたので、もし三男が亡くなったら夫を支えなくてはと思いました。自分は勤務先の高校から避難所へ3日目に移りました。高校の避難所の伝言版に“お母さんは中学校にいる”とメッセージを残しました。義母は島で無事のはず。生徒達を守らなければとも気持ちで生きました。

5日水がひけました。5日間は避難所で、5日間は知人宅で。中古車を60万円で買ひ古川の弟宅から7月まで4カ月間、1時間半かけて通いました。仮設で一年半。家族をどう守るかをいつも考えていました。しばらく人と会いたくない、人に誘われても行きたくないという時期もありました。帰る家がないということは、ご飯をつくる必要がないという不思議な解放感もありました。

40歳で図書館司書になりました。島から高校の図書室に7年間通いました。転勤で石巻の高校になり、朝6時半の船で出勤、夕方5時50分の船で帰宅。10月から12月の3カ月はホタテの耳釣り(10回)で夫を手伝います。ずっと夢だった家を2013年に建てたのですが、震災で夢がかなったということです。家が流失していなかったら建てられませんでした。古民家風の家が夢で、土地は以前に取得していました。市内は島より便利。新築の家に人を呼びたいけれど、広いきれいなスペースに、自分だけ建てていいのかとの後ろめたさもあります。まだ仮設や狭いアパートに暮らす不自由な生活をしている人が、恨みや妬みを感じるかも。しかし、自分らはがんばって建てたのだとも思います。島(500名)の掟やしきたりを守り縛られていましたが、今は解放されました。

島の家では、物にあふれていました(本、CD、子供の着もの)。あってもなくてもいいものは入らないのです。物がガレキとなって、波に流され、ばかばかしい。震災後、4日間、自宅に通って片づけました。家の解体にたちあいました。生きるのに必要なものは、そんなにはなく、お金をつぎ込んでも無駄です。夫は漁業を再建。資材や船を調達。小学生の孫を二人失くした船大工さんに頼みました。大工さんにとっては生きる希望となったようです。役所の支援の書類は複雑で、読み書きパソコンができないと不利になるので、本当に必要な人に支援がいったか疑問。

以前、多額の負債の経験。くじけている暇がない、しかたない、前に進むしかない。島の生活では、いつか津波はくるものとの準備、覚悟がありました。家族が無事でよかった。時間を戻してほしいと思いません。震災は人生の延長。次元の違う世界にタイムスリップした感覚。お払い箱の古着を送って人達に失望。食事作り、体力作りにはげんで、将来は食事を自宅で提供したい。支援ボランティアに自宅を開放したい。この場所のこの時代に生まれた因果。震災前は、自分の人生は何事もなく、こうやって平凡に終わるのかと、ぼんやり考えていました。

2014年8月31日

14) D.Cさん (70代)

自分が52歳の時、夫が肺がんで他界。16年前です。人が死ぬということがわかりました。夫ができなかった分を自分がやると思ったのが、自分の生き方を変えました。結婚と死別が人生で大きい出来事です。夫は市議員でした。妻として、皆さんに一票をお願いするのは大変だと実感。夫は優しく親切で夢のある人だったので、おかげで夢をみさせてもらいました。自分は若いころ、家業の酒屋の配達や客相手をしていました。若いころから、困っている人を助けたい、何かしたいとの気持ちがあり、海外へも行きたいと20歳ころから思っていました。

18歳から会社に勤めはじめました。周囲の人から食事をごちそうになり、いろいろと連れて行ってもらったので、自分もできる環境になったら、やりたい、役に立ちたいと考えていました。夫が他界後、保険の仕事、法律事務所受付の仕事を始めました。真面目にやっていると仕事が巡ってきます。何歳で死ぬかわからないので、適当にほどほどに自然に生きていきたいです。経済的・社会的・精神的に自立する女性が大切だと若い頃から思っていました。4人の息子を育てあげるなかで、いろんな人と関わりました。女性は臨機応変、器用に生きられ、頭でいろいろ家事や仕事を交通整理するのです。

震災後、自分のできることを惜しまずやっています。息子家族、知人夫妻を自宅へ泊め、9人の共同生活。知人の差し入れ：肉、野菜、燃料は、ありがたかったです。近所づきあいの大切さ。息子家族は10月までいたので、食事作りは楽しかったです。食べさせる接待が好きなので、苦になりませんでした。水は、水汲みに行ったり、井戸水からもったり。大きな地震があったら、高台へ逃げ、命を大切に。震災後、慰問のコンサート（集会所、病院、生協、老人ホーム）をしています。59歳でシャンソンを習い始め、60歳でコンクールに出て入賞。2011年6月にシャンソン仲間が集まりコンサートをしました。有名なシャンソン歌手が石巻に来て元気をもらい、仲間も元気になりました。その歌手も震災当日、コンサートする予定の市民会館で被災しました。痛みを自分のこととしている歌手が一生懸命なので自分も応援したいです。これからは自分ももっと施設を訪問して元気がでる歌を歌いたいです。夢を持っていればいい。

2014年9月13日



まだ不自由な生活の中でも点てる茶

15) E.Fさん(60代)

以前の自宅は流失。震災直後、母親と叔母を、娘の車に乗せて小学校へ避難。体育館にカギが閉まっていたので入れないので校舎へ行こうとしましたが、校庭で津波に巻き込まれました。気がついた時には下駄箱の上で、辺りは水でした。みんなバラバラになりましたが、娘と次の日に再会。ボランティアは、バスが通る大きな道にしか花壇を作らず、かつての自分がいた土地には花壇を作ってくれません。自宅跡から、残った花を仮設にもってきています。公営住宅が当たって来年の秋に引っ越しますが、みんなには言っていません。当たっていない人もいますから。土地の借り上げには、まだ応じられません。自宅跡付近に新築できますが、また津波が来るかもしれないので建てたくありません。

当時の支援物資の配分に不満。毛布を何枚も持って行く人、たくさん服を持って行く人がいました。公営住宅は庭がないので、引っ越しは楽しみじゃありません。アパートだから土がありません。一軒家に住みたいです。地元の住民の意見を聞かない市の復興の在り方に不満。よそから来た人が復興をしている。

防潮堤は、強度が弱いので反対。裁縫や手芸が好きで、東京のボランティアが自分の作品の販売を手伝ってくれています。生き残った自分。かつての自宅にあったもの“あそこの引き出しにあったなあ”と留袖の着ものを思い出すことがあります。一回しか着ていないのに。自分は目が不自由。公営住宅に引っ越すとき、手伝いが必要です。孫がトマトをとりにくるので、鳥に食べられないようにビニールをかぶせています。ねこに餌をやらぬように近所の人に言いました。付近のゴミ置き場の鳥が迷惑。豪雨で仮設の斜面の土が流れ、チューリップの球根があらわになりました。それを拾って自宅前に植えました。

2014年9月16日



チューリップの球根を植える2012年

16) H.Gさん(60代)

復興だけでなく世界平和を考えつつ、共に暮らす世界を作りたいです。生活の土台である台所から世界平和を唱えたいです。台所が変わらないと世界は変わらない。震災時、いろんな国から助けてもらい世界はつながっているとわかりました。復興のあり方を考えつつ、出会った人との関係や広がったつながりを大切にしたいです。より所、行き場所が必要。脱原発。人間は自然の一部ですから、穏やかに地球にやさしい生き方を考え、自然の贈り物に感謝したいです。自然はいじわるじゃない。

自分は土に帰るのだと思います。神に創造された人間であり、生きる体験、苦労やわかちあいを通じて、共に生き生かされている存在。ピリオドがいつ打たれるかわからない、どうなるかわかりません。震災前の関係は家族、友人、親戚だったけれど、震災後はおもいもかけない日本中、世界中からの支援で、自分の枠を大きくしてもらいました。国を越えて心配してもらい助けられありがたく、感謝です。ネットワーク、人はすべて大切。自分は何ができるか？生きていることは支えあいから成り立っているのです。仲良く安心して暮らすこと。生きることの継続であり、震災は人生の一コマです。シェアすることで仲間が増えます。

震災時、自宅に人が集まり、いろんな人が出入りし、しゃべり、輪が広がりました。幅が広がりました。ボランティアにご飯を提供するようになりました。仕事をやめて一年後に被災。台所が自分。季節のものを作っておもてなしして、“おいしい”と言われて嬉しい。ボランティアを泊めたり、浜を紹介。こんな所に来てくれて、まずはありがたいです。開かれた家庭が大切です。人の出入りで夫も変わりました。震災前は自宅に人を招くことはあまりありませんでしたが、震災後は人の世話をし役にたちたいと思うようになりました。自分が用いられ、生かされていることで存在する自分で、自分の発見です。

震災で、支援を受ける立場になり、かけつけるボランティアに驚き。これが神がいう隣人で、自分もこうなりたいと思います。することを与えられている自分。生かされている喜び。自分は精一杯やってきたが、それ以上に支援の輪。お金ではなく、人との寄り合い、共に寄り添うことが、本来の人間の姿なのです。老いる(死)ことも考え始め、弱いから共に生きるのではないのでしょうか。生病老死について、出会いから考えさせられました。これからの計画は、おいしい石巻のものの販売、不登校の若者支援、病気でも働ける活動の場を作りたいです。多様な場所で、核家族から地域での共生型社会へ。

2014年9月23日

17) JIさん (50代)

地球全体に関心があります。人間じゃなくて。3.11の時、今、死ねないと思いました。自分の命を守らなくちゃと。まず自分の命それから次。家族がいることが大切。感をたよって、直感、反射の力が大切です。チリ地震を体験(中瀬)し、教育と訓練でほんのわずかの差で決まると思います。火事場の馬鹿力のように女性は強いです。津波がきて、1.5mの塀を乗り越えました。津波を見た時、あっ、死ぬなと思ったのです。命が危ないと直感。乗っていた車に「ありがとう」と言って、知らない人の家の二階へ避難。マンションの上から男の人が「そこにいろ」と叫んでくれました。家の人々が避難してどこかへ逃げようとしていましたが、その住人が「入らいいん」と招き入れてくれました。タイミングがよかった。13日、線路を渡って帰り、すれ違う人と情報交換。石巻は全滅かと思いました。

見えない力に助けられた気がします。食べ物は高齢者へ渡しました。丘の人達は被災者を泊めていました。自分の家族は無事なので、職場優先だと思いました。女性は臨機応変、優先順位をつけました。職場は女性が多かったので、生活の知恵を活かし、細かい所に気がつき、衛生面、プールの水でトイレなど工夫しました。支援学校で食事作り(プロパン、調理室)。近くの農家や自衛隊から野菜をいただく。生徒の安否確認(一週間後)。

被災者が避難してきたので対応、運営。日赤の患者も。市役所の管理者が役に立たなかったです。自分を守ることと、家を失った同僚に食べものをあげたいと思いました。自分にできることは何か、自分の好きな分野で楽しい事をしたいです。ニーズがあり、2011年にNPOを設立し、知的障害者や自閉症の子供のための空間を作りました。みんな違う絵を描いています。見ることで自分も癒されました。みんながやっているからとの理由じゃありません。宇宙、空、生命が好き。人間を作ったのは宇宙。人間は宇宙のしずくかも。自由に飛びたいです。

6歳の女の子を描き続ける自分。生まれた瞬間から6歳までに、すべての自分がそこにあると感じます。死ぬ時、原点に戻る気がします。無口な子供時代。しゃべらない。大人の視点で同年代の子を見て、うるさい幼い子供達だなあと観察していました。今、「描きたい」と思います。最近、「6歳を描くために生まれたんだ、これだ!」とストーンとききました。自分を肯定するのが難しく悩んでいた時、ハワイに一人旅をしました。空からこぼれる光が、「これでいいんだ」と言ってくれました。

障害は不幸ではありません。家族が大切、一緒にいる幸せが大事。自分を肯定することも。2014年、いろんなひらめきがありました。不幸は物を失う事じゃなく、死ぬことでもなく、人間の負の部分が出た時、たとえば裏切り、周囲の支えが無い時、温かい家族がない時で、そういう時に人はくじけるのかもしれない。必要とされる人間になり、生きていけばいい事があります。ロウソクで集まり、一つの部屋で眠り、バラバラだった家族が一緒になったあたたかい雰囲気。みんなが集まると温かい。みんなでいけばいい。物じゃない。ミカンを4つに切って嬉しかったです。残りの人生を絵にかけ、死ぬまで1000枚描きたいです。あふれるテーマとひらめき。

2014年10月1日

18) L.Kさん(70代)

若いころ、2時間だけのパートで組織で働き、商品を棚に並べる仕事でした。息子が小学生のころ、だんだん一日3時間になり、その後エリアマネージャー、そして理事になりました。3.11は佐沼で会合。古川の知人宅に13日までいて、その後タクシーで石巻に帰り義母、夫、息子と合流しました。3人は日和山へ車で避難していました。高校で5月まで避難生活。毎日、6時に決まっていた夕食の時間が、仕事をしている人には不便でした。南浜の家が流失。4人で仮設へ移りました。早い時期に仮設が当たったのは、何かコネであつたと噂されました。大きな地震の時は、とにかく逃げるのが大切です。

市内の店舗へ物資を届けました。マナーが悪い人もいて、何回も持って行く人、こっそり持って行く人、職員の靴を持って行く人がいて嫌になりました。その時、がんばりすぎていた自分に気がつき、自分も癒されるべきと思いました。支援者のための支援プログラムにはっとしました。ボランティアの食事作り、おびたしい物資のしわけ、お茶のみ会の準備(お菓子、飲み物)に疲れ果てていました。半面、やりがいもありました。仮設に閉じこもっていたら気分が落ち込みますから、支援する側にたち達成感がありました。自分はエリアリーダーの聞き役。防災というが、いくら備えがあつてもいつどんな形で起こるかわかりません。備えが役にたつか疑問。失つたものも大きいですが、日本、世界から支援をいただき、得た物が大きいです。

以前は仕事でもプライベートでも毎年、海外へ行っていました。以前の自宅の庭には200鉢の花がありました。仮設でも花作りをしています。60歳でパソコンを始めました。来年、家を建てる楽しみができました。99歳の義母を今年亡くしました。家を流失しましたが、他の人に比べれば、自分がかすり傷の被災です。知人は娘や孫を失つたり、母か孫か、どちらかしか救えない時、母を見殺しにしたり、残された遺族もけんかがあります。遠方からのボランティアも、どの仮設を支援するかで悩んだり、同じ仮設住民同士でいさかいがあり、恵まれた仮設とそうでない仮設があるので。仮設の集会所はグループができて、仲間外れにされる人もいます。

子どもの写真や海外旅行のお土産、服を失いました。季節の変わり目に「あの服があつた」と思いだし、もうないのだとハッとします。家族を失つた悲しみに寄り添い、共に泣いています。沖縄の台風被害を見て「大変かなあ」と言ったら、息子は「こっちは3年半も仮設だ」と。娘が仙台にいて、3.11当時にお風呂のために秋生温泉へ行きました。ストレスは仲間にしゃべります。

2014年11月8日

19) N.Mさん (70代)

3. 11の日、喫茶店「モミの木」が店内でロウソクをつけ、ドアを開け放し被災者を受け入れていました。パンをもらいました。(オーナーの女性は2014年11月10日に逝去)自分は生きているのではなく、生かされていると思います。夫は震災後、癌を発病し、手術と入院をしたので、私は高速道路で毎日病院へ行きました。主治医は3年もつかどうかと言いましたが、現在も元気でほっとしています。息子は鬱とDV、交通事故、ボヤを体験しています。2013年に、借りていた家を買いました。3. 11当日、夫と共に車で小学校へ避難。豆腐、リンゴ、油揚げの支給がありました。校庭で10日間、車中で猫を抱きながら生活しました。その後、夫の実家や兄の家へ。八戸の友人がガソリンをもってきてくれました。猫が亡くなりました。田代島で子猫のころ助けて、島から石巻へ連れてきました。夫に命をくれたのでしょうか。二匹目の猫は夫と散歩が好きです。

被災当時、辛いと感じませんでした、夢中だったからでしょう。疲れたと思わなかったのです。見舞いの帰り、高速道路のパーキングエリアで、ある日、「野菜が食べたい」と強く思いました。被災したのは、自分だけじゃない、みんなも同じです。知人が遠方からきて日和山から写真を撮っていましたが、一緒に写真に入れたい気分でした。外部と内部の温度差を感じました。日々、食べていかなければなりません。何かしてなければ、落ち着きません。知人からの手紙に「普通に戻りましたか?」とありました。普通って何?普通を取り戻すって何?と自問しました。言葉に表せませんが、あふれる物に囲まれる生活のこと?豊かさって?何が大切かと考えています。神から与えられた試練、神が決めたルールで、人生に組み込まれた震災ではないかと。

母は自分が小さいころ離婚し、女手ひとつで育ててくれました。母の再婚。転校の繰り返し。いじめにもあい、学校へ行きたくないと言うと、「いいよ、外へも出ないね」と母に柱に縛られました。自分も離婚を経験しました。人生はこういう風になっていたんだ。若いころ札幌で看護師として結核病棟勤務していました。苦しみは薄皮のようにはがれる、明日一枚づつめくられます。すり鉢の底の様などん底、明日はまた別のどん底。明日考えよう。3. 11は苦しくなく、悲しくもありません。忘れるから人は生きられるのではないのでしょうか。

2014年10月26日



ひなたぼっこ

20) P.Oさん(30代)

3. 11の日は、お花の稽古に行きましたが、駐車場で忘れ物をしたことに気づき家に戻りました。途中で被災。妹の住む高台に逃げ、しばらく泊めてもらいました。守られている奇跡を感じました。妹の家はプロパンガスで旧式の石油ストーブもあり、生活に困りませんでした。津波があったら、妹のいる高台へ逃げると両親からいつも言われていたので、命を守る意識が高かったのでしょう。先祖に守られているように感謝しています。「お天道様がみているから悪い事はできない」と、日ごろ思っています。命に感謝。化粧品品の石けんを支援として配布しました。

以前から美容の仕事がしたいと思っていたので、震災後、仙台へ行きました。いい機会で、新しい生活のきっかけとなりました。美容で自立しようと、夢へ一歩を踏み出すことができました。初めての一人暮らしと美容サロンの仕事が始まりました。震災に対する仙台と石巻の人々の温度差がありました。大好きな故郷、石巻がいつも心配でした。何かしたい、役に立ちたいと思いました。2年半のサロンでの経験を積んだ今、自分の美容サロンを開き潜在的な夢が実現しました。癒しの空間とおもてなしの心で、自分ができることで誰かを支えたいです。みんなのサポートを受け周りに助けられながら、やりたいことをやれる今です。女性がきれいになると男性も元気になり、社会がよくなって社会貢献するような気がします。自分のサロンを経営することは働きやすく、経済的精神的に育児、家事の両立ができます。

アンテナをはって夢を持って思い続けることが大切です。物じゃなく人のつながりや出会いが大事だとわかりました。一人では生きていけません。お金に変えられない何かがあります。親友が病気で亡くなり、命について考えています。もっと生きたかった人がいるのです。健康で元気なことに感謝しています。4年後の今も、津波が心配で、気持ちが不安定になることがあります。まず自分をいたわり、満たして、そして他人に幸せをおすすめできればと願います。ニコニコの笑顔が循環するといいですね。

2015年2月28日



満開のチューリップ2012年

終わりに

手にとったり、目でとらえたりできない気持ちを自らの言葉で表現してくださった石巻市の20人の女性達。東日本大震災を経験して、何をどう受け止め、何を思い考えているのでしょうか。

私が20人にお会いしてお話を聞いて感じたことは、あの日2011年3月11日は彼女達の心の奥に深くしっかり刻みこまれて、過去、現在、未来がつながっていることです。震災の当日のことを、つい昨日のように詳細を思い出し、その後の経験をたどりながら、今日現在の現実に向きあい、話は幼かった時の過去へともどり、また、これから待っている未来へとおよびました。

女性達のそれぞれの物語には幾つかの共通点もあります。自分の意志を越えて「生かされている」、失ったものも多いけれど、得たものも多く、震災前は想像もしていなかった出会いや出来事に「感謝」、他人から必要とされる存在でありたい「奉仕や貢献の気持ち」、あらためて気が気づいた「家族の大切さ」、支援に駆けつけた日本中・世界中の人々との「つながり」。また、過剰な物質的満足を省みて、精神的「豊かさ」への価値観の転換、自然との共生への関心、家族や隣人、他人との間での物の共有の重要さ、空間と時間を分かちあう共同生活から得る心理的充足感もあげられます。

日々、迷いながら行ったり来たりしながらも何かを始めようと動き始めた女性達。震災前から抱いていた夢を実現したり、震災がきっかけとなり新しい夢に向かって一歩を踏み出した女性達もいます。被災地で生きる、その強さとしなやかさは、どこからくるのでしょうか。私が知りたかったことの一つです。お話の中で、家族の病気や入退院、戦争体験、若くしての夫との死別や離婚、多額の負債、計画の失敗、親の介護、家族間の不和や心配事といった非常に個人的経験も教えてくださいました。震災前の人生そのものが丸ごと被災時の行動と対応の基礎となり、その後の生き方に反映されるのかもしれませんが。

彼女達のメッセージが、日本や世界のどこかの女性達へ届くことを願います。

最後になりましたが、私とのお話の時間をくださった20人の女性たちに心より感謝申し上げます。

2015年9月25日

聞き手 千葉 直美
宮城県石巻市にて

聞き書きを今後も続けたいと考えております。
発行を支えてくださいますでしょうか。
問い合わせ先 e-mail swan20110311@gmail.com